

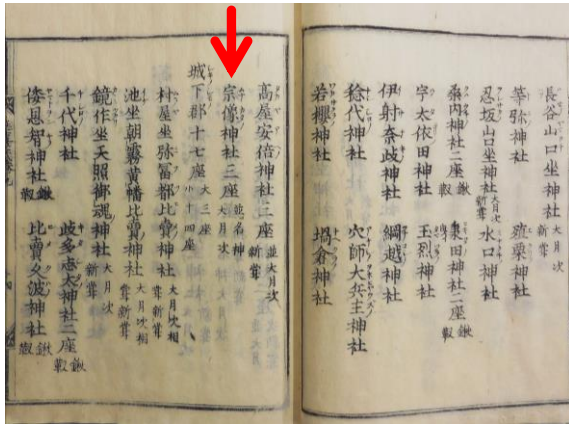


高市皇子と大和国の宗像神

『新修宗像市史』 原始・古代部会から

高市皇子が勧請した宗像神社

宗像神社は日本の各地に勧請されていきました。今回は、宗像君の血を引く高市皇子が勧請したと伝えられる宗像神社について紹介します。その神社は、奈良県桜井市大字外山小字宮の谷に現在も鎮座しています。『延喜式』神名帳にも大和国城上郡に宗像神社三座が鎮座することが記



『延喜式』神名帳にみえる大和国宗像神社 (九州歴史資料館提供)

されています。

ところで、高市皇子の息子の左大臣長屋王は、神亀六(七二九)年二月に起こった長屋王の変において、藤原氏の謀略によって謀反の罪を着せられ、自害に追い込まれました。ただし、その子孫は生き残り、とくに長屋王の曾孫で、高階真人の氏と姓を賜わった峯緒王の子孫は、藤原摂関家や白河法皇をはじめとする院の権力と結び付いて、全国の国々の受領(国司)に任命される中級の貴族として活躍し、学者、歌人、詩人を輩出しています。

『類聚三代格』という平安時代の法律書が掲載する、寛平五(八九三)年十月二十九日の文書には、高階忠峯が大和の宗像神社の修理料を申請した文書が引用されており、高市皇子が宗像郡金崎の隸属民十六人や毎年の自分の収入を分けて、神社の建物の修理料にあてていたとあります。また高階忠峯らは、天武天皇の時代以来、高階氏の氏が神宝や園地をたくさん奉納しており、高階氏が

代々、神社の運営を執行してきたと主張しています。

大和国宗像神社の衰微と復興

南北朝時代に宗像神社は兵火で焼失し、後に興福寺がこの地に外山庄という荘園を経営するようになる。春日明神と若宮社を勧請して、宗像神社も春日社と称するようになりました。正平九(二三五四)年に高階忠正は神霊を自邸に移し、中島弁財天と称します。

中島弁財天はそのまま江戸時代末まで祀られ続け、嘉永七(一八五四)年に国学者の鈴木重胤がこの土地の里長の玉井某の庭園に中島弁財天が祀られていることを知り、これが宗像三女神であると考え、その衰微を嘆いて、宗像神社の再興に尽力しました。安政六(二八五九)年に筑前の宗像神社より神霊を迎え、万延元(一八六〇)年に社殿が完成し、明治八(一八七五)年に春日神社の社号を廃して宗像神社としています。

現在の大和国宗像神社

現地はJ・R・近鉄の桜井駅から東

の方に徒歩約二十分の場所です。現在の社殿は、平成二十一(二〇〇九)年四月二十六日に氏子により造営され、竣工したものです。神社の前には小さな公園があり、そこに立つ昭和五(一九三〇)年一月に建立された石碑には、高階氏の子孫にあたる三人の玉井氏の方の名前が刻まれています。宗像氏と高市皇子の血脈に連なる人びとが、一三〇〇年の時を越えて、宗像大神の祭祀を受け継いでいることに驚かされます。宗像からはるか遠い奈良県の地でも、古代豪族宗像氏の祭祀は今なお確かに生きています。



大和国宗像神社の社殿 (奈良県桜井市大字外山)

(原始・古代部会 酒井芳司)